

1 事業名 平成29年度教育事業 「体験の風をおこそう」運動協賛事業
How To ボランティア ～ボランティア活動の基本を学ぼう～
兼「NEAL自然体験活動指導者（リーダー）養成研修」

2 趣 旨

「How To ボランティア～ボランティア活動の基本を学ぼう～」

講義や演習、野外活動体験等の研修をとおして、青少年教育におけるボランティア活動に必要な基礎的な知識・技術について学ぶ機会とする。

「NEAL 自然体験活動者（リーダー）養成研修」

専門的な講師の指導の下、自然体験スキルを習得することで、ボランティアに必要な資質・能力を高めるとともに、NEAL リーダーとして必要な知識・技術を身につける。

3 期 日 平成29年5月27日（土）～5月28日（日）

4 参加者 ボランティア活動に興味関心をもつ高校生、大学生 41名
（高校生 2名 大学生 39名）

5 協 賛 Water Dragon Foundation
NPO法人日本国際ワークキャンプセンター（NICE）

6 後 援 岩手県教育委員会

7 内 容

(1) 日 程

5月27日（土）

9:00	9:15	9:30	11:00	11:30	12:00	13:00	14:30	15:00	19:00	19:30	20:30	21:30	22:30
受付	開 会 行 事	青少年教育施設の 現状と運営	NEAL 概論 I	写 真 撮 影	昼 食 ・ 休 憩	ボ ラ ン テ ィ ア 活 動 の 意 義	移 動	ボ ラ ン テ ィ ア 活 動 の 技 術 課 題 解 決 型 野 外 炊 事	移 動	法 人 ボ ラ ン テ ィ ア 制 度 と 登 録 に つ い て	青 少 年 教 育 施 設 に お け る ボ ラ ン テ ィ ア 活 動	入 浴 ・ 休 憩	就 寝

5月28日（日）

6:30	7:00	7:30	9:00	12:00	13:00	14:30	15:00	15:30	
起 床	洗 面 ・ 清 掃	朝 の つ ど い	朝 食 ・ 休 憩	安 全 管 理 救 急 救 命 法 に つ い て	昼 食 ・ 休 憩	青 少 年 教 育 と 体 験 活 動	ア ン ケ ー ト 記 入	閉 会 行 事	解 散

(2) 指導者

岩手県立大学 社会福祉学部社会福祉学科 講師
日本赤十字社 岩手県支部 赤十字救急法指導員
日本赤十字社 岩手県支部 赤十字救急法指導員
国立岩手山青少年交流の家 所長
国立岩手山青少年交流の家 副主任企画指導専門職
国立岩手山青少年交流の家 企画指導専門職
国立岩手山青少年交流の家 事業推進係長
国立岩手山青少年交流の家 事業推進係
指導補助

菅野 道生 氏
佐々木 孝司 氏
落合 恵子 氏
松田 栄二
佐々木 真里子
工藤 祐幸
田口 康宏
山崎 啓陽
法人ボランティア

(3) 企画のポイント

ボランティア活動に興味関心をもつ高校生・大学生が、ボランティア活動の基本について、講

義・演習をとおして学び、ボランティアとして活動する上で必要な資質や施設を活用するためのスキルを身に付けるため、事業のプログラム構成に当たっては、魅力的な体験プログラム、魅力的なボランティア仲間、魅力的な講師を意識した。NEAL リーダー養成研修として、ボランティア活動とともに自然体験活動への興味・関心が広がるようなガイダンスとした。

(4) 広報のポイント

青森、秋田、岩手の三県の大学と岩手県内の高等学校には、チラシを配布する広報を行った。また、施設のホームページにおいて、参加フォームを設け、インターネット上から申し込めるようにした。盛岡大学には、年度初めの4月に事業のガイダンスを実施し、事業の趣旨や内容の説明と広報を行った。過去の事業の様子をスライドショーで紹介し、事業内容がイメージしやすいようにした。このガイダンス実施の案内チラシを、法人ボランティアが作成し、部活の勧誘時期に大学内で配付した。

(5) 運営のポイント

講義の講師として、ボランティアについての造詣が深く、経験豊かな県立大学の菅野氏を招聘した。参加者の緊張感を解き、安心して研修に参加できるように、アイスブレイクを講義の始めに行った。「ボランティア活動の技術」では、野外活動を安全に行うための知識を学び、活動中も安全管理を意識させた。さらに、班の交流を深めることができるように、複雑な調理ではなく、野外炊事の基本的メニューである「カレーライス」の隠し味部分で工夫することができる活動を組み入れた。「青少年教育施設におけるボランティア活動」では、今後のボランティア活動に見通しがもてるように、岩手山青少年交流の家で行われている事業を紹介するとともに、先輩ボランティアの企画を紹介する活動を組み入れた。先輩法人ボランティアも、先輩としてのやりがいを感じ、自己肯定感が高まるように、裏方の作業的な部分からは外し、参加者と多く交流できるように、班付きのリーダー・全体統括として組織した。

8 成果とその普及

参加者同士が交流する場面を多く設定できたことにより、参加者は意欲を持続して取り組む様子が見られた。県立大学から招聘した菅野氏の講義により、参加者同士が交流を深めながらボランティアについて自然に考えていくことができる流れで講義を組んでいただき、今後のボランティア像などの理解を体験的に深めることができた。参加者41名全員が、法人ボランティア登録を行った。本事業の参加者に対して、ボランティア活動の意義や魅力を十分に伝えることができた。法人ボランティアを班付きや全体統括として組織したことで参加者の声を聴きながら講義を受けることができた。また、自分たちが法人ボランティアになった時にあこがれていた先輩に、今、自分になっているという実感を、参加者の声を身近に聞くことで実感することができた。先輩ボランティアたちの意欲も高めることができた。今回の一般参加者の多くは、先輩法人ボランティアの魅力に誘われて参加した人たちだった。人と人とのつながりが広報にも勝るものだということが分かった。

9 今後の課題

登録した法人ボランティアを一人の人間として育てていくことが、私たち職員の役目であると考え。「法人ボランティア」は事業等の「お手伝い」という捉えではなく、事業に参加することで、ボランティア自身が成長できる、スキルアップできる場を、事業の中に設定していく必要があると考える。既に連携協定を結んでいる岩手大学や近くの県立大学で、盛岡大学の社会教育活動実習のような単位が取れる仕組みを構築していく必要があるのではないかと考える。今回の盛岡大学社会教育実習のガイダンスの日程と奨学金の説明会の日程が重なっているということが、当日分かった。盛大との連絡調整を密に行う必要がある。



救急救命法の様子



野外炊事の様子



講義の様子